

“たったひとりのおんたうのほんたうの神さま” 小考

— 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』覚え書き

島 田 隆 輔

はじめに

その晩年、一九三一（昭六）年あたりから手がいれられて成った童話『銀河鉄道の夜』の最終形、すなわち第四次稿の終章「ジヨバンニの切符」で、汽車が停車場サウザンクロスにまもなく到着しようとするあたりに、船の難破事件で自己犠牲をえらんで死んだ、キリスト者である女の子や連れの青年との対話が、

「僕たちと一緒に乗って行かう。僕たちどこまでだって行ける切符持つてるんだ。」「だけどあたしたちもうここで降りなければいけないのよ。こゝ天上へ行くところなんだから。」女の子がさびしさうに云ひました。

「天上へなんか行かなくなつていぢやないか。ぼくたちここで天

上よりもっといいところをこさへなければいけないって僕の先生が云つたよ。」「だつておつ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ。」「そんな神さまうその神さまだわ。」「あなたの神さまうその神さまよ。」「さうじゃないよ。」「あなたの神さまうその神さまですか。」青年は笑ひながら云ひました。「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんななしにほんたうのたった一人の神さまです。」「ほんたうの神さまはもちろんたった一人です。」「あゝ、そんなでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さまです。」「だからさうぢやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくししたちとお会ひになることを祈ります。」青年はつましく両手を組みました。

とみえる (1) (傍線は島田)。

女の子が「もうこゝで降りなけあいけないのよ。こゝ天上へ行くとこなんだから」といい、青年も「いまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひになることを祈ります」という。船の難破事故で、ほかの人の命をすくうため自己犠牲をえらんだその死を、神の御前にいたるところで完結させるのをよしとする彼らに対し、ジョバンニは「そんなんでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さま」のもとで、「もっといいところをこさへ」る——あらためて生きなおしてゆくことを訴えかけているようである。

### 一 「ほんたうのほんたうの神さま」とは

イエス・キリストのつたえる絶対唯一の天上の神による魂救済をもとめる人たちは「ほんたうの神さまはもちろんたった一人です」として、ジョバンニのいうほかにも存在しうる神をみとめることができない。

それに対して、「よく知りません」といいながらも、

そんなんでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さまがあることをはつきりと、ついには「ほんたうの」をくりかえしてまでも主張するのだった。ジョバンニには、天上の存在として、そのような心象がむすばれていたのである。

この先も汽車に「一緒に乗って行かう」という願いをききいれない彼らの唯一の神への信、それを「そんな神さまうその神さまだ」と反論するが、これは否定したというのでなくてまさに子どもらしく、抵抗したのにすぎまい。神への信仰をいうキリスト教をそれはそれとしてみとめたうえで、さらに超えた存在として「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」を位置づけようとしている、とみえてくる。

またこれを、仏さまとジョバンニにいわせなかったころには、キリスト教対仏教という対立軸を限定的に設定するのでなく、仏教の如来たちの存在もまたそれとしてみとめたうえで、それらをもさらに超えてあるもの、ということとを暗示しているのではなからうか。

けれどもそのような天上観が、宮沢賢治の晩年に突如としてあらわれたわけではない。

その萌芽といえるのは、二四（大13）年頃の第一次稿にあらわれていた。

「だけどあたしたちもうこゝで降りなけあいけないのよ。こゝ天上へ行くとこなんだから。」

「天上へなんか行かなくなつていぢやないか。もっといゝところへ行く切符を僕ら持つてるんだ。天上なら行きつきりでないって誰

か云ったよ。「だっていけないわよ。お母さんも行っていらっしやるんだし。」

傍線を付した「誰か」なる存在の暗示である。これは第二次稿へとひきつがれながらも、大正末年に成立していった第三次稿では消失していった。

それは、「こゝ天上へ行くところなんだから」とする女の子が、「だっていけないわよ」と拒否したことばの、第四次稿における展開をみると、

だってお母さんも行ってらっしやるしそれに神さまが仰っしやるんだわ。

とあって、キリスト教の神の説くいわば自己完結を実現する天上世界に対して、しかしそこが「行きつきりでない」——行き止まりなのではない、と説く別な存在が見つめられている、というふうに読めるであろう。

というのも、第三・四次稿段階には、女の子たちとわかれてしまったのち、カムパネルラが窓のとおくにみえる野原を指さして、

あすこがほんたうの天上なんだ。あつあすこにゐるのぼくのお母さんだよ。

というのである。キリスト者たちがむかつていった所とは別に、「ほんたうの天上」があるとすゝる認識がにじみできて

ている（ただこれもまた「行きつきりでない」可能性がある）。それをおしえた第一・二次稿の「誰か」とは、第三次稿以降の「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」につながっているものかもしれない。

それにしても二四年の段階で、天上世界の無限性への入り口に、ジョバンニもまたみちびかれていたようである。だから二六（大15）年には、宮沢賢治自身、『農民芸術概論 綱要』のなかで、

農民芸術とは宇宙感情の 地人 個性と通ずる 具体的な表現である  
（「農民芸術の本質」）

と、「宇宙感情」の存在に想到し、その「結論」では、われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である

と断言する。「宇宙感情」といい「透明な意志」というとき、キリスト教の神や仏教の如来たちにかぎられない、それらを超えたものをまなざしているようにおもえる。

## 二 「ほんたうのほんたうの神さま」の醸成

「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」は、第二次稿までの段階にはみられなかったものである。第一・

二次稿のあの「誰か」がきえてから、二六年にかけて醸成されてきた第三次稿において、

・ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんたうのたった一人の神さまです。

・あ、そんなんでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さまです。

と、とどのえられてきたものだった。そこに、「銀河を包む透明な意志」にかかわるものとしてとらえうる、余地がありそうにおもわれる。

ところで、この「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」にも前景があったようである。しかもそのいづれもが、仏さまにかかわるありようだった。

まず、兄弟が死後のさまよいをする『ひかりの素足』である。二二（大11）年から二三（大12）年にかけての制作かと推定されている作品で、これを天沢退二郎<sup>(3)</sup>が、

愛する者をそこに置いてひとり主人公が現世へ戻ってくる設定が、「銀河鉄道の夜」を予告していることはい

うまでもない。

とする。

中有という異界にあつて、弟の櫓夫をかばい鬼に鞭うたれていた一郎が、「によらいじゆりやうぼん」とつぶやくと、

赤い瑪瑙の野原のはづれがぼうつと黄金いろになつてその中を立派な大きな人がまっすぐにこちへ歩いて来るのでした。

（三、うすあかりの国）

と、鬼のいるような場所だったはずが、黄金色にかがやく場所へと一変し、その人を前にした一郎は、

まぶしいやうな気がして顔をあげられませんでした。その人ははだしでした。まるで貝殻のやうに白くひかる大きなすあしでした。くびすのころの肉はかぐやいて地面まで垂れておりました。大きなまつ白なすあしだったのです。けれどもその柔らかなすあしは鋭い鋭い瑪瑙のかけらをふみ燃えあがる赤い火をふんで少しも傷つかず又灼けませんでした。地面の棘さへ又折れませんでした。（四、光のすあし）

という。一郎を現世に生還させてゆくこの「立派な大きな人」を、如来寿量品（法華経）の教主、釈迦牟尼仏の影とみてもひとまずはさしつかえないであろう<sup>(4)</sup>。

この「すあし」のひとが前景にあつたということになると、さらにふたつのスケッチも付随してくる。

ひとつは二二年五月二一日の心象にあらわれた、「小岩井農場」における、

・みんなすあしの子どもらだ／ちらちら瓔珞もゆれてゐるし／めいめい遠くのうたのひとくきりづつ／緑金寂靜のほのほをた

もち／これらはあるいは天の鼓手 緊那羅のごどもら

(パート四)

・あなたがたは赤い瑪瑙の棘でいつばいな野はらも／その貝殻のやうに白くひかり／底の平らな巨きなすあしにふむのでせう

(パート九)

という幻視。いまひとつは、二三年八月一日にえた、

天の瑠璃の地面と知つてころわなき／紐になつてながれる  
そらの楽音／また瓔珞やあやしうすものをつけ／移らずし  
かもしづかにゆききする／巨きなすあしの生物たち

(「青森挽歌」)

という幻想。その心象に、いずれも「巨きなすあし」のものを明滅させながら、しだいに「白くひかる大きなすあし」の人をむすんでゆくのである。

次に、二三年以後の成立とみられる『マグノリアの木』がある。これについても、天沢退二郎<sup>(5)</sup>が、

詩人が自分の心象風景自体の中でその險しき暗さから癒されていく過程が、みずみずしく表出されているといえよう。

と評し、また杉浦静<sup>(6)</sup>は、主人公諒安のありようが「ジヨバンニの総体」にかさなるとみる考察をしている。

諒安が行じていた山谷が、マグノリアの花の発見を契機

に、「けはしいひどいところ」から「何といふこの立派さ」へと変貌する。そのとき、

「さうです。マグノリアの木は寂靜印です。」／強いはつきりした声が諒安のうしろでしました。

するとそこには、

子供らと同じなりをした丁度諒安と同じくらゐの人がまっすぐ立ってわらってました。

という。「子供らは羅をつけ瓔珞をかざ」っていて、それとおなじなりの菩薩らしき「人」が、諒安を「覚者の善」へとみちびいてゆく。ついには、

さうです。そして又私どもの善です。覚者の善は絶対です。それはマグノリアの木にもあらはれ、けはしい峯のつめたい巖にもあらはれ、谷の暗い密林もこの河がずうっと流れて行って氾濫をするあたりの度々の革命や饑饉や疫病やみんな覚者の善です。

とする、過酷、悲惨な事象さえ「覚者の善」の現われだともみる心象をむすぶにいたるのである。

さらには、『銀河鉄道の夜』の生成過程においても前景とみうる存在があつたようにおもう。たとえば、第一次稿に、

「いるかは海に居るときまっけて居ない。」あの不思議な低い声がまたどこからかしました。

とあらわれてきて、第二次稿で、

お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。

とさとす「あのセロのやうな声」としてあらわれ、それが第三次稿では「ジヨバンニの切符」と章立てたなかで、

ほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる。

といい、

この頁一つが一冊の地歴の本にあたるんだ。

という、盧舎那仏を教主とする「華嚴經の世界へつながる」と入沢康夫(7)が指摘する〈本の本〉の話をした「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」としてあらわれてきた。世界の真相らしきをかたるこの存在と同段階に「ほんたうのほんたうの神さま」もあらわれており、ふたつはつながりうるのではないか(けれども最終の第四次稿では、「セロのやうな声」の「黒い大きな帽子をかぶった大人」の存在も言動もみえなくなる)。

### 三「ほんたうのほんたうの神さま」のゆくえ

宮沢賢治自身、このように実にさまざまな影を心象にむすんでは、変転する残像を作品として堆積してゆく過程があった。その延長上にたどりついてきたとするならば、『銀河鉄道の夜』においてジヨバンニの心象にむすばれた「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」もまた絶対とはいえず、そのゆくえもあやういのかもしれない、ということになる。

そのことを、詩人はたぶん自覚していた。というのも第三次稿段階で、あの「セロのやうな声」の「黒い大きな帽子をかぶった大人」が、前節の引用部分につづいて、ジヨバンニに、

ぼくたちはぼくたちのからだだだって考だって天の川だって汽車だって歴史だつてたゞさう感じてゐるのなんだから。

と、かたる。「たゞさう感じてゐる」という立場にあるとするならば、それはもう、永遠のこと／もの、でありえないだろう。

実は、先の「小岩井農場」や「青森挽歌」をおさめて二四年に刊行された『春と修羅』の「序」には、

人や銀河や修羅や海胆は／宇宙塵をたべまたは空気が塩水を呼吸しながら／それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが／それらも畢竟こゝろのひとつの風物です

とあった。あらゆるもの／＼の「本体」をかんがえたところで、それらは「畢竟こゝろのひとつの風物」（にすぎない）とまでいっていた。世界に対したときのひとつひとつの心の風物、これを「心象スケッチ」と称したわけである。「白くひかる大きなすあし」の人をむすんだその心象も、永遠のものといえないだろう。

それはしかし、虚無思想なのではない。

たとえば、一八（大7）年二月の父宛書簡46のなかに、戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候

とあり、この時分から「一心の現象」というとらえ方があらわれてきたようである。また、盛岡高等農林学校を退学させられた保阪嘉内宛の三月の書簡49にも、

静に自らの心をつめませう。この中には下阿鼻より下有頂に至る一切の諸象を含み現在の世界とても又之に外ありません。（略）退学も戦死もなんだみんな自分の中の現象ではないか

とみえている。阿鼻地獄から有頂天にいたる事物・事象——「戦争とか病気とか学校も家も山も雪も」「退学も戦死も」、あらゆるものが「一心の現象」「自分の中の現象」だという。この「一心」という理解の背景には、華嚴経を讀

む体験があつたと推量される（8）。

大部な華嚴経であるが、仏駄跋陀羅の漢訳六十卷本を一七（大6）年から刊行された『国訳大蔵経』（国民文庫刊行会）がおさめており、宮沢家にも架蔵された。その夜摩天宮菩薩説偈品第十六には、いわゆる唯心偈が説かれている（第一書房復刻本により、ルビは取捨）。

心は工画師の如く、種種の五陰を画き、一切世界の中に、法として造らざる無し。

心の如く仏も亦爾なり、仏の如く衆生も然なり、心と仏と及び衆生とは、是の三差別無し。

諸仏は悉く一切は心より転ずと了知したまふ、若し能く是の如く解らば、彼の人は真の仏を見たてまつらん。

さらには、十地品第二十二に、

三界は虚妄にして、但是れ一心の作なり。

とみえる。ここで「一切は心より転ず」とし「三界は虚妄にして」という、一見強烈なこの唯心思想は、世界の真相にたどりつきがたい、そうしたもどかしさも付随させてしまいがちだが、「一心の作」を不毛なものとして否定しざるわけではもちろんない。

というのも、木村清孝（9）に、

つまりは、『華嚴経』に従えば、他のすべての人びと、あらゆる事物・事象も仏たちさえも、私たち一人ひとりが描き出す画像にほかならない、というわけです。

(略) このことは、私たちの心がちょうど鏡のように外界の存在をそのまま映し出しているのではなく、むしろ外界に積極的にはたらきかけ、そのイメージを構成し、それにもとづいて生きている、ということを立て証しております。

との指摘がある。

自らの心の無常を踏まえながら、それによってつくりだされた世界に、だからこそ主体的にかかわって、その実相にたちむかうことをむしろみちびくものだと、気づかせてくれる。ならば、たどりついてきた「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」という存在を――「さう感じてある」ことを、「虚妄」なものにしないためには信ずる者として何をなさねばならないか。

そのような自問が、宮沢賢治にももたらされていたのではないだろうか。

#### 四 「ほんたうのほんたうの神さま」と実践と

心象としてむすばれた虚妄なるものとしても、

あ、そんなんでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さまです。

とくりかえし強調するジョバンニにとってその存在をより確信すること、それをささえるためには、他者のために自らの命を犠牲にしてきたのに、

もうここで降りないといけないよ。こゝ天上へ行くところなんだから。

と、「天上」をその終点として自己完結的にさってゆくのではなく、

ここで天上よりもっといいところをこさへないといけないって僕の先生が云ったよ。

と、天上に対置されるところの「こゝ」に、しっかりと踏みとどまることだった。「こゝ」というのは、夢のなかでいまのっている汽車にかぎられるのではもちろんなくて、やがて覚醒をしたときにおりたち踏みしめている「地上」でくりひろげられている現実の世界におよんでゆくものの中にいないであろう。

このことばは、第一・二次稿では、

もつといいとこへ行く切符を僕ら持つてるんだ。

とあったのを、第三次稿において「こさへないといけない」



という断然主体的、積極的な教えとして推敲されたものである。それは、あの「セロのやうな声」が、

お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。

(第二次稿)

とする論しに応じるものであり、根底において響きあっているようにおもえる。

女の子たちとわかれたあと、ジョバンニに、

僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためなら僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない。

と、自己犠牲などいとわぬ思いがわきおこってきて、そのうで、

なんにも見えずた、眼がしんしんと痛む

という石炭袋の孔の暗みを眼のあたりにしたとき、

僕はもうあんな大きな暗の中だつてこはくない。きっとみんなのほんたうのさいはひをさがしに行く。

と、「みんな」のために行動する決意を表明するにいたる。

それも、

ここで天上よりもっといいところをこきへないけけない

という、この教えが起点となり、また支えとなつていることがわかる。天上の「たったひとりのほんたうのほんたう

の神さま」を一心に仰視しつつ、それゆえに地上の世界においてこそ「みんなのほんたうのさいはひ」をもとめる実践をいつまでもはたしてゆかねばならない。

このような利他への無限な生き方を認識してゆくジョバンニ像の造形を、大正末年段階のこの第三次稿がはたした、その背景には、妹トシとの永訣以来かんがえつづけてきた、「みんな」のための信仰実践ということの、ひとつの到達があつたとおもえる。それは、『農民芸術概論綱要』の先駆となつた、二六年一月からの岩手国民高等学校<sup>(10)</sup>における「農民芸術」の講義にうかがえる。三月一日の授業のときだつた。

正しく強く生くるとは、銀河系を自らの無意識として自覚しこれに応じて進むことである、／我等は世界のまことの幸福をもとめや<sup>マ</sup>／道を求める其の事に我等は既に正しい道を見出した、／仏教で云ふ菩薩行より外に仕方があるまい (序論)

と、宮沢賢治は発言するのである<sup>(11)</sup>。「菩薩行」は法華経でも華嚴経でも強調されている<sup>(12)</sup>。その菩薩とは、

大乘仏教においては、最高の悟りを求める心(菩提心)をおこして、自らの修行の完成(自利)と一切衆生の救済(利他)のために六波羅蜜を行じて成仏

を目指す人

(『岩波仏教辞典第二版』)

であった。

『銀河鉄道の夜』にかさねると、「みんなのほんたうのさ  
いはひ」を追求してゆこうとする、そのことによつてジョ  
バンニ自身の成長もまた念じられていくことに気づく。そ  
して六波羅蜜の行とは、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・  
智慧のことをいうが、その第一にかかげられた布施が最大  
の利他行となる。そこでは、捨身という、

他者を救うために我が身を捨てて布施すること、

が最上とされている<sup>13)</sup>。この点については、最終第四次稿  
において、級友ザネリを救助し自らは川のなかにしずむと  
いう、カムパネルラのありようを追加することによつてし  
めされてゆくことになる。

## 五「ほんたうのほんたうの神さま」の超越性

宮沢賢治は「仏教で云ふ菩薩行より外に仕方があるまい」  
との自覚にたどりついてしたが、「銀河鉄道の夜」の生成を  
すすめるなかで、

仏 ↑ ↓ 菩薩行

といった仏教世界における構図を描きだすことなく、

たったひとりの　　みんなのほんたうの  
ほんたうのほん ↑ ↓ さいはひをさがしに  
たうの神さま　　行く

と、天上の神と地上の人という構図を提出するにいたつて  
いる。すでに本稿の一節で、

仏さまといわなかったところには、キリスト教対仏教  
という対立軸を設定するのではなく、仏教の如来たち  
の存在もまたそれとしてみとめたうえで、それをまさ  
らに超えてあるもの、ということを示しているので  
はなかるうか。

と、問題の予告をしておいたが、それでは、「たったひとり  
のほんたうのほんたうの神さま」とはいったいどういう存  
在なのか。

かつて吉本隆明<sup>14)</sup>は、「青年のいう「ほんたうの神」は  
宗派の神でしかない」として、

どんなひとにとつても「ほんたうの神」であるものだ  
けが「ほんたうの神」だ。もつといえは「そんなんで  
なしにほんたうのたつたひとりの神」だ。

といったが、実体がもうひとつつかみきれない。そこにす  
こしでも接近しようとするならば、手がかりは、先の「仏  
教で云ふ菩薩行より外に」といった、

くで云ふより外に

とする言いまわしにあるのではないか。

つまり、キリスト教など仏教以外の宗教もまた同列においてその探索におよんだうえで、あの「仏教」でいうところの「菩薩行」がえらびとられた、という経緯があったことを示唆しているとおもえる。いま地上にあつて、「世界のまことの幸福をもとめ」る「正しい道」として、何が適切かと検討した結果、自己犠牲までも秘めた利他の徹底行動が浮上してきた、という言いまわしである。それは、ついに「仏教」が最善、至高なる〈信仰〉だと判断した、ということではないとみえる。

さらに、本稿の一節末にしめしたとおり、『農民芸術概論 綱要』における「宇宙感情」や「銀河を包む透明な意志」といった見方も踏まえて、この「神さま」のありようをかんがえてみると、あの書簡の一節が想起されてくる。

どうしても棄てられない問題はたとへば宇宙意志といふやうなものがあつて（中略）所謂信仰と科学とのいづれによつて行くべきかといふ場合私はどうしても前者だといふのです。すなわち宇宙には実に多くの意識の段階がありその最終のものはあらゆる迷誤をはなれてあらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとして

ある

（書簡252c、下書四）

これは、結婚問題に悩んでいたキリスト者高瀬露にあてた、二九（昭4）年のものと推定されている<sup>(16)</sup>。「どんな事があつても信仰は断じてお棄てにならぬように」と呼びかけをしたうえで、「宇宙意志」というものがあつて「実に多くの意識の段階があり」、「その最終のもの」は「あらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとしてゐる」という。

要するに「宇宙意志」のもと、その意識段階の、あるところ、たとえばイエスの啓示した父なる神がおり、またあるところには、たとえば如来たちや菩薩たちがいる。あるいは、こういうべきなのかもしれない。キリスト教の神でも仏教の如来たちでもあつたものが、その最終の段階に、彼らを超えて「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」として出現する、ということではないか<sup>(16)</sup>、と。

おわりに

「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」を、あの「宇宙意志」にかさねてみるならば、あらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとしてゐる

存在になる。それは、宮沢賢治にとって〈真理〉と言いつけることができることもあつたらう。佐藤泰正<sup>(17)</sup>がこの『銀河鉄道の夜』に、

賢治におけるなみならぬキリスト教への関心の深さを軸としての、ひらかれた宗教性への熱い希求であり、問う所の核心は宗教における真の倫理の所在である。とみてとつたことにかかわっている。

真剣にその信仰ということをまなざすものとして、その〈真理〉を現に証明するためには、

ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえなければいけません、地上の実践にたちむかう必要がある。〈真理〉のほうもまた、あの「セロのやうな声」をかりて、くりかえししめせば、

お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。

と、現実世界においてさまざま難題に対峙してゆくことを、もとめているといえるのだらう。

この啓示が第四次稿ではかくされてしまったのだけれども<sup>(18)</sup>、三二年の宮沢賢治の実際には、

巖に 日課を定め 法を先とし 父母を次とし 近縁を三とし 社会農村を最後の目標として 只猛進せよ

(『雨ニモマケズ手帳』10・29)

と、「社会農村」への実践をはたそうとする、残生の覚悟としてひきとつている(現実には、死病をおうた身にできることはかぎられたであらう)。「日課を定め」「法を先と」するというのは、この地上での現実生活の行動規準について、法華経によるというのだらう。

またもや、セロの声をくりかえししめすと、

ぼくたちはぼくたちのからだだつて考だつて天の川だつて汽車だつて歴史だつてたゞさう感じてゐるのなんだから。

とある世界の見方は、華嚴経の唯心思想にかかわっているかとみた(本稿三節)。のみならず、「心は工画師の如く」と説く唯心偈にみちびかれ、以来、「一心の現象」をその都度に書きとめてゆく、あの〈心象スケッチ〉によって、この世界の実相にせまろうとしてきた可能性もかんがえられるようにおもう<sup>(19)</sup>。

ただ、こうした仏教の受容と実行とをこの地上でしつかりとはたしながらも、折りにふれて宮沢賢治は、天上はるかに、「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」を仰視していたのではないか。そのような〈信仰〉のありようが、『銀河鉄道の夜』のかたわらに、うかびあがってくるのである。

〔注〕

(1) 宮沢賢治のテキストは、『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房）による。引用にあたりルビは取捨。

(2) 本稿二節にも引用するが、

みんながめいめいじぶんの神さまがほんたうの神さまだといふだらう、けれどもお互ほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだらう。

とする「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」のことばが、第三次稿にみえる。

(3) 『新修宮沢賢治全集』第八巻後記の解説（筑摩書房一九七九）。

(4) 伊藤雅子「光のすあしは誰か」は、三十二相の身金色相（肌が金色）にたがうこの人物が「立派な瓔珞をかけ」ているのに着目、観普賢菩薩行法経（法華経三部の一）により、

六牙の白象に乗る普賢の身体は白玉の色である。

ではへ貝殻のやうに白くひかる大きなすあしゝの持ち主は普賢菩薩であろうか。

とせまっている（『賢治研究』60号一九九三・五）。

(5) 『新修全集』第十四巻後記の解説（筑摩書房一九八

〇）。

(6) 「宮沢賢治「マグノリアの木」考」（『近代文学論』14号一九八六・三）。

(7) 『討議『銀河鉄道の夜』とは何か』（青土社一九七九）、51〜53頁。

(8) 「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」のいう〈本の本〉が華嚴経菩薩十住品第十一の一即多・多即一の教えに、「たゞさう感じてゐる」が唯心偈の教えに通ずるところから、

おまへがあふどんなひとでもみんな何べんもおまへといっしよに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。

とする論しのことばも、華嚴教学の法界縁起を背景に読みうる。つまり「セロのやうな声」には華嚴経からの影響が感じられる。それでは「たったひとりのほんたうの神さま」という超越的な存在をまなざすこと（本稿五節）に齟齬をきたす点で、第四次稿で削除されたという側面もかんがえられるか。

(9) 『華嚴経入門』（角川ソフィア文庫）、16・17頁。

(10) 岩手県独自の農村青年の育成の場として二六年一月から三月まで花巻農学校に開設されたが、皇国精神の発揚がその実質だった。この試みは国策の青年訓練所に吸収

されてゆく。閉校後、農学校を辞職、羅須地人協会活動にむかうことになる。

本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。

とする啓示への、実際の応答とみえてくる。

(11) 伊藤清一『講演筆記帖』（『新校本全集』第十六巻上、194<sup>ページ</sup>）。

(12) 品立てに注目すれば、法華経には、

常不軽菩薩品第二十、薬王菩薩本事品第二十三、

妙音菩薩品第二十四、観世音菩薩普門品第二十五、

普賢菩薩歎発品第二十八

で個別に教示。それに対して華嚴経は、

菩薩十住品第十一、功德華聚菩薩十行品第十七、

金剛幢菩薩十廻向品第二十一、十地品第二十二

で、四十の修道階位をしめし、最後「入法界品第三十

四」で善財童子による求道の具体をしめして、菩薩へ

の道を浮き彫りにしている。

(13) 法華経薬王菩薩本事品第二十三に、

仏を供養すと雖も、身を以つて供養せんには如か

じ。(略)自ら身を然して、光明徧く八十億恆河沙

の世界を照す。(略)善男子、是を第一の施と名く。

諸の施の中に於いて最尊最上なり。

としている(訓読は島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』により、ルビは取捨)。

(14) 『宮沢賢治』(筑摩書房一九八九)、172<sup>ページ</sup>。

(15) 高瀬露が遠野鍋倉神社の小笠原家に嫁するのが三二年なので、三一年秋以降の可能性もある。

(16) すでに大塚常樹「宮沢賢治と宇宙科学」が、

『華嚴経』を下敷きに既成のキリスト教や仏教の対立を止揚した、新たな宗教や歴史を構築しようとする目論んだのではなからうか。賢治は、悪人正機説にも通ずる如来蔵思想によって、すべての人々(生物)が幸福でありうる宇宙(共同体)を夢見たのではなからうか。

とみている(『宮沢賢治心象の宇宙論』<sup>コスモロジー</sup> 朝文社一九九三)。また山根知子が『銀河鉄道の夜』を読み解くキイワード(『国文学』一九九四・四)において「ほんたうの神様」を解説し、

『法華経』も含む既成宗教の排他性を越えて、宇宙を自らの中に意識し感応することであらゆる人の本当の幸いを探す宗教を求める思いがあり、それがこの「ほんたうの神様」論争に顕著に表われて

いるといえるのである。

と指摘。さらに田中末男「ジヨバンニの〈神学〉」（『宮沢賢治』17号二〇〇六・一〇）も、

賢治の法華経信仰は、国柱会から日蓮、さらに法華経へと普遍化されていった。そしてさらに「法華経」さえ超えて、それが指し示す当体、「万象同帰」のその「いみじい」根源にまで遡っていった。

（略）「もう信仰も化学と同じやうになる」というのは、結局すべて法華経に帰するという意味ではない。おそらく人類の「究竟地」では、「法華経」という「語さえ滅する」

ととらえて、キリスト教や法華経を超えた信仰の視圈を獲得していったことを示唆する。

(17) 「賢治とキリスト教―『銀河鉄道の夜』再読―」（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇〇・一一）。

(18) この啓示については、注16の山根論が、  
地上の厳しい現実の中で「あらゆる人」の幸福をめざして生きることが地上を天上に変えることであるという思いがここにはある。

として、それは、

この苦難の世界を離れ天上の幸福を求めるキリス

ト教、さらに言えば同じく極楽浄土を求める既成  
仏教（父の信仰した浄土真宗等の仏教）をも含め  
た既成宗教の現状への痛烈な批判

だとする。これが第四次稿で採用されなかったのはその「現状への痛烈な批判」をあらわにする点で躊躇された、ということなのかもしれない。

(19) 島田「華嚴経から心象のスケッチへ」（『論攷宮沢賢治』15号二〇一七・三）。なお、三一年七月以降の使用と推定される『兄妹像手帳』の20頁に、

Mental Sketch／Modified／1931.9.6.  
The Great／Milky Way／Rail Road

とする記入があり、『銀河鉄道の夜』もまた〈心象スケッチ〉の延長上にあるといえるようである。

（中村元記念館東洋思想文化研究所研究員）